

朝日地球会議2018

朝日地球会議2018は、2018年9月24日から26日まで3日間にわたり都内で開きました。朝日新聞社最大の国際シンポジウムは、国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」に全社、グループ会社含めて力を入れて取り組んでいることを、国内外にアピールする場としても定着してきました。趣旨に賛同してくださる協賛企業数も協賛金も目標を上回り、来場者は、小中高生、大学生、院生、省庁や企業に勤める人たち、NPO関係者など、3日間でのべ5000人にのぼりました。

18年のメインテーマは、国内外で広がる不寛容を問題視し、「次世代への約束 もっと寛容な社会に」としました。セッションや展示は、それを反映し、ジェンダー、平等、働き方、ものづくり、人工知能(AI)、バーチャルリアリティ(VR)、IoT、生物多様性、自然エネルギー、ESG投資、地域づくりなどを取り上げました。約30のセッションに、50人を超える国内外の識者、政策決定者、企業人が登壇し、SDGsの理念「誰一人取り残さない」世界の実現へ向けて、活発な議論を交わしました。

初日の来賓挨拶は、SDGsの実現を「企業行動憲章」の柱に据えた経団連の中西宏明会長が、「企業行動そのものが持続的な世界を作っていくための方向を追求するべきだ」と話されました。続く小池百合子都知事は、都が電気自動車の購入補助を拡大する方針を発表し、翌朝の1面記事となりました。初日は休日で学生が来やすいため、グローブ編集部やハフィントンポスト日本版によるセッションは満員で立ち見が出たり、ロビーにモニターを設置したりしました。

翌日の来賓挨拶は、野田聖子総務大臣が「女性や高齢者、障害者の活躍など多様性こそが日本を救う」と力を込めて訴えました。引き続き開いたのは、「女性が拓く未来イノベーション」パネルディスカッションで、キャシー・松井ゴールドマン・サックス証券副会長ら経済界でリーダーシップをとる女性たち3人が登壇しました。もうひとつのパネルディスカッションは「台頭するポピュリズム、危機に瀕する民主主義」と題し、パリ政治学院のペリノー教授、プリンストン大学のミュラー教授、米歴史家のウッダード氏、作家の佐藤優氏が、これからの世界をめぐる活発な議論を繰り広げました。

3日間を通じて、初めての試みはいくつかありましたが、なかでも工夫したのは、啓蒙的になりがちな内容をユーモアや笑いで伝える方法です。1日目は、お笑い芸人の髭男爵・山田レイ53世さん、3日目にはパッケンマッケンに登壇してもらいました。17年の吉

本興業SDGs大喜利が内外に好印象を残したのを踏襲したのですが、社会問題を笑いに包みながら、印象に残るかたちで広く伝えていく術は今後も大事にしたいと思います。今年の朝日地球会議2019は、10月14日から16日にかけて開催します。



(左から)パリ政治学院教授のパスカル・ペリノーさん、プリンストン大学教授のヤン＝ヴェルナー・ミュラーさん、歴史家・ジャーナリストのコリン・ウッダードさん

(フォーラム事務局マネジャー・中村うらら)